
銀魂～冷血の鬼姫の日常～

ナナフシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂（冷血の鬼姫の日常）

【Zコード】

Z5198Y

【作者名】

ナナフシ

【あらすじ】

ちょっととした趣味で書いてみました。

銀時に義兄妹が居たら？ つと思つて書いてみました。

二次小説なんて初めてなので上手く書けたか不満です。
まあ、あらすじを書いてみますか。

攘夷戦争時、白夜叉の隣に立っていた女が居た。

女の名は雨宮咲、咲は『冷血の鬼姫』と言っていた。
咲は無表情で天人を斬る事からそう呼ばれた。

敵から恐れられた武神である。

そして、今、その咲が銀時の目の前に現れて万事屋に入る。
万事屋トリオと咲が織りなすコメディー？だと思います。

シリアルスならごめんなさい。

それが嫌な方は回れ右！

咲は銀時のことが好きと言う設定なのでよろしくお願いします。

第一訓（義妹）

歌舞伎町を一人の女が歩いていた。

その女人人は超美人である。

彼女の水色の髪を靡かせて歩いていた。
腰には木刀を挿している。

すれ違う度に男の人がその女に釘付けである。
女は空を見上げた。

「この町に居るのかな……銀兄さん」

女はそう呟いた。

女は歩き出した。

「誰かに聞いてみようかな」

女は辺りを見回した。

「あ、あの子に聞いてみよ」

女は眼鏡を掛けた青年に近づいた。

「あの、聞きたい事があるんですが」

「あ、はい、何でしようか？」

女が喋りかけたのは、地味眼鏡の志村新八であつた。

「誰が地味眼鏡だコラア！」

新八は地の文にツッコンだ。

ツッコンでも意味ないのにね。

「あの、誰に言つてるんですか？」

「ああ、すみません。何かバカにされた気がして」

新八は女にペコッと謝つた。

「それで何か用ですか？」

「え」と、人を探しているんですが……」

「特徴とか、名前は？」

「銀髪で天然パーマで年中死んだ魚の様な目をした男で、名前は坂

田銀時」

「え？ 銀さんに何か様ですか？」

新八は女に尋ねた。

「え、知り合いなの！？」

女は新八に詰め寄った。

「は……はい」

新八は頷いて答えた。

「銀さんが営んでる万事屋で働いている志村新八です」

「私は雨宮咲です」

女はそう名乗つた。

「案内してくれませんか？」

「え？ はあ、今向かう所なので良いですよ」

新八は承諾した。

「ここです」

新八は万事屋銀ちゃんの前まで来ていた。

「ここかア」

咲はそれをじいじと見ていた。

「こっちです」

新八は階段を上がり始めた。

「あ、はい」

咲はその後をついていった。

「ただいま戻りました銀さん」

新八は万事屋のドアを開けて入った。

咲もそれに続いて入った。

そして、リビングに行くと銀髪で天然パーマの男がデスクに座つてジャンプを読んでいた。

その男は坂田銀時である。

ソファでは、オレンジ髪の少女が居た。
少女は神楽である。

「銀さん、客人ですよ」

「あ？ 誰だ……！」

銀時はジャンプから田を離して咲を見ると驚いた。

「さ……咲！」

「見つけた銀兄さん」

咲はニシコリ微笑んだ。

新ハと神楽は咲の言葉を聞いて驚いた。

「ぎ、銀兄さん！？」

「銀ちゃんの兄妹アルカ！」

「血は繋がつてないけど、義兄妹だよ」

咲が銀時の代わりに答えた。

「咲……テメエ生きてたのか？」

「酷いなア、勝手に殺さないでよ」

咲はそう言った。

「私は銀兄さんが生きてて安心したよ」

「あ、ああ」

銀時は頷いた。

「で、何しに来たんだ咲」

「銀兄さんに頼み事があつて」

咲は銀時に近づいた。

「何だ？」

「ここに住ましてくれない？」

咲はそう言った。

「うーん、どう？「ダメ？」「うー」

咲は上目遣いで銀時を見る。

「良いよね？」

「涙目。

銀時は我慢の限界であった。

「わかつた！わかつたよー！」西田が叫んでいた。

銀時はそう答えた。

一 ありがとう銀兄さん！」

咲は銀時に抱き合った

根詩は二三の歌の通

万事屋メジバーこ送が加わつた。

第一訓～義妹～（後書き）

作者「どうも、作者のナナフシです」

咲「オリキャラの咲です」

作者「色々な二次小説を読んだと書きたくなつたので思い切つて書いちやいました」

咲「銀魂～冷血の鬼姫の日常～を読んで頂きありがとうございます」

作者「上手く書けてるか心配ですが、前向きに書いてこいつと思います！」

咲「これからも……」

作者・咲「よろしくお願いします！」

咲のキャラ紹介（前書き）

ナナフシ「はつきり言つて僕服装のセンスないから咲の服装思いつかないからその人の想像に任せます」

咲「キャラ紹介なのに！？」

銀時「ダメ作者だな」

ナナフシ「うん、自覚してるから」

咲「否定しないの！？」

ナナフシ「自覚はあるから」

銀時「つまり認めてるんだな？」

ナナフシ「ああ、そして……銀さんのシスコン！」

銀時「俺はシスコンじゃねえ！」

ナナフシは銀時に木刀で殴られる。

ナナフシ「ゴファアアアア！」

咲「あはははは……では、今回は私のキャラ紹介です……どうぞ

咲のキャラ紹介

名前	雨宮 咲
年齢	19歳 誕生日10月19日
好き	甘い物、銀時
嫌い	辛い物、土方、今の高杉（昔は嫌いではなかった）
髪	水色
瞳	赤色

すごく美少女なのだが、銀時の事が好きなブラ「ン」。

銀時の事を「銀兄さん」と兄として呼んでおり、銀時も義妹だと認証している。

剣の腕は銀時の次に強く、攘夷戦争に参加した経験がある。

攘夷戦争では“冷血の鬼姫”と呼ばれていた。

過去の戦いの……“冷血の鬼姫”の頃の記憶が蘇ると無表情で相手に襲いかかる。

たとえ攻撃を受けても無表情である。（ダメージを喰らつてる事には喰らつてます）

今では銀時と同じ様に「自分の大切なものを護る」と叫び思念を貫いています。

新八の事は「新八さん」、神楽の事は「神楽ちゃん」と呼んでいます。

よく銀時と喧嘩する土方を嫌っている。

ナナフシ「こんなもんでしょうか」

咲「まあ、読者から感想を貰つて、まだ教えてほしい所があるなら書けばいいんじゃない?」

ナナフシ「そうですね!服装以外なら咲の教えてほしい所を受け付けます!」

銀時「頑張れナナフシ」

ナナフシ「おうよ銀さん!」

咲「それじゃあ、私のキャラプロフィールは終わりです」

咲のキャラ紹介（後書き）

ナナフシ「次回は咲が歌舞伎町を歩き回ります」

咲「もちろん銀兄さんと一緒によね？」

ナナフシ「えーと、それはまだ一緒によね？」は……はい！

ナナフシの首には何処から持ち出してきたのか知らないが刀が向けていた。

咲は顔が無表情だった。

ナナフシがそう答えると刀を鞘に収めた。

ナナフシ「ふ、ふう、助かった。さてと次回は“第一訓”咲の歌舞伎町周りです！」

咲「次回もよろしくお願ひします！」

第一訓～咲の歌舞伎町周り～（前書き）

咲「親父にもぶたれた事ないのに！」

銀時「急にどうした咲！？」

咲「いや、作者のナナフシにこれを言つてって言われたから」

銀時「思いつきりガ ダムじやねえか！」

ナナフシ「いや、今のアニメ銀魂は蓮蓬編じゃないですか？あれでガン ム出てきたし……咲に言わせてみようかなって」

銀時「思えばナナフシは ンダムも好きだつたな」

ナナフシ「はい！後は銀さんお願ひします！」

銀時「おつー“銀魂”冷血の鬼姫の日常～始まるぜー！」

第一訓～咲の歌舞伎町周り～

「銀さん！今日は仕事もないし、咲さんに歌舞伎町を案内してあげましようよ！」

いきなり新ハがこんな事を言い出した。

今日はつて……滅多にないくせに。

「本当…」

咲は顔を輝かせて答えた。

「ああ？んなもん怠いから新ハと神楽で案内をしてこいよ」

銀時は頭を搔きながら言った。

「銀兄さん……案内してよ……」

咲は前回と同じく上目遣いで攻めてきた。

「嫌だ！」「お願いだよオ」……「うつ」

「涙目……てか、前回と同じじゃん！」

銀さんがまず怯むとは……恐るべし咲！

「だあ！わかつた！案内してやれば良いんだろー！」

銀さん……咲の攻撃にえなく撃沈。

「ありがとう銀兄さん！」

咲は銀時にお礼を言った。

ちゃんとお登勢には話を通してある。

銀時はその時お登勢にアッパーされたらしいが。

万事屋メンバーは咲に歌舞伎町を案内する事になつた。

「……で、何で腕組み？」

銀時は咲を見た。

銀時と咲は腕組みをしていた。

「銀さん……僕達から見れば恋人同士に見えるんですけど……」

新ハは銀時にそう言った。

「いや、俺と咲は義兄妹だから」

銀時はそう答えた。

「あ、お花屋さんだ」

咲は花屋を見つけて近寄った。

銀時、新八、神楽は顔が青ざめた。

「色んなお花があるな～」

咲が見ていると。

「いらっしゃいませ」

中から出てきたのは、鬼の様な顔をして、緑色の人物……

「初めまして、僕、花屋をやっています。屁^{ペニ}努^ヌ紹^ウです」

赤い眼を光らせて、恐ろしい声で自己紹介した。

それを見た咲は冷や汗を流し、顔を青くした。

そして、銀時の方を向き、涙目で助けての目線を送った。

屁努紹は万事屋トリオを見つける。

「おや、坂田さんに志村君に神楽ちゃんじゃないですか

「ど、どいつも屁努紹様……いや、屁努紹伯爵」

銀時は引きつった顔で挨拶した。

「屁努紹で良いですよ。彼女は坂田さん達の知り合いで？」

「そ……そうです……」

新八も引きつった顔で答えた。

咲は銀時に涙目でしがみついて、体をブルブル震わせている。

「そうですか。お名前は？」

「あ……雨富咲です……」

「雨富さん、これからもよろしくお願ひします」

屁努紹は笑つた顔で言った。

それが更に恐く見えた。

そのまま、へドロの森を出た。

「い……恐かったよオ」

涙目で今だ銀時にしがみついている。

「ま、まあよく頑張つたじやねえか

銀時はそんな咲の頭を撫でる。

公園に入ると、サングラスをかけたおっさんがベンチで横になっていた。

「よお、長谷川さん」

銀時はその男の事を長谷川と呼んだ。

「ああ、銀さん達か……その子は？」

「初めてまして、雨宮咲です」

「俺は長谷川泰三だ」

「マダオこんな所でどうしたアルカ？」

「マダオ？」

「だから俺はマダオじゃないって！」

長谷川はマダオを否定した。

「神楽ちゃん、マダオって何？」

「まるでダメなおっさん、略してマダオアル

「まるでダメなおっさん……」

咲は長谷川を哀れみの目で見た。

「ちょっと！咲ちゃんがひいちゃってるじやん！」

「まだまだ色々アルネ。まるでダメな夫、まだまだ堕落するおっさんとかね」

咲は更に哀れみの目を向いた。

「その目をやめてええええええええ！」

長谷川は大声で叫んだ。

長谷川と別れて歌舞伎町の町を歩いていると。

「む、銀時と新八君とリーダーではないか」

銀時達に話し掛けたのは黒髪で長髪の男だった。
隣には、白いペンギン？が居た。

「よお、ゾラ、エリザベス」

「ゾラじゃない桂だ……咲ではないか！」

「久しぶりゾラさん」

「ゾラじゃない桂だ！」

銀時達に話し掛けたのは、攘夷志士の桂小太郎である。

その隣に居るのはエリザベスである。

「ゾラさん……これ何？」

咲はエリザベスを見て桂に聞いた。

「ゾラじゃない桂だ。こいつはエリザベスだ」

『どうも、エリザベスです』

エリザベスは文字が書かれたプラカードを出して挨拶した。

「ど、どうも」

咲は戸惑いながらも挨拶をした。

「咲も居る事だし……銀時、咲よ！今こそ攘夷志士になると」

「嫌だ（だよ）」

二人の返答はハモつた。

「何故咲まで！？」

「もう私は攘夷は真っ平ゴメンだよ。また仲間が死ぬ所は見たくないもの」

「咲さんも攘夷戦争に参加していたんですか！？」

「うん」

新八と神楽は咲が攘夷戦争に参加していた事に驚いた。

「白夜叉の隣に立ち、無表情で天人を斬る事から“冷血の鬼姫”と呼ばれたお前と銀時の力さえあれば！！」

「ゾラ、前にも言ったが、もう俺達の戦は終わつたんだ。まだわからねえのか？」

「それでもd「桂アアア！」」

ズドオーン！

バズーカか何か撃つ音が聞こえた。

そして……ドカーン！

爆発した。

桂とエリザベスはそれを避けた。

飛んできた方を見ると……黒い制服を着た男一人が立つていた。土方と沖田である。

「ちつ、真選組か！さらばだ銀時、咲！」

桂とエリザベスは走つていった。

「後を追いかけるぞ総悟！」

「わかつてますぜい」

二人はパトカーに乗り、桂とエリザベスの後を追つた。

銀時達はと言うと……爆発ヘアーになつていた。

こうして、歌舞伎町案内は終わつた。

第一訓～咲の歌舞伎町周り～（後書き）

ナナフシ「最後が爆発ヘアで終わりでした！」

銀時「ふざけんじゃねえぞ！ナナフシ！」

咲「別の終わり方はなかつたの！？」

ナナフシ「いや、思いつかなかつた」

銀時・咲「おい！！」

ナナフシ「では、第一訓終了です。次回からは銀魂の原作を使います」

咲「オリジナルストーリーも考えてるんだよね？」

ナナフシ「はい、オリジナルストーリーではオリキャラが出てきます」

銀時「それネタバレじゃねえか？」

ナナフシ「どうせ、オリジナルストーリーの時点でわかっている人も居ますよ」

銀時「たくつ」

ナナフシ「それではさよなら！」

第二訓～真選組に女隊士が来た～（前書き）

ナナフシ「オリキャラが思ついたので出す事にしました」
銀時「チンピラ警察共のかよ」
咲「第一のオリキャラも女なんだね」
ナナフシ「はい……キャラプロフィールは次回いつつ事で」
銀時「そんじや、わっさと始めんか」
ナナフシ「はいはい、それではどうぞー」

第二訓～真選組に女隊士が来た～

「おい、新しく入つてくる奴知つてるか？」

「ああ、何でも女なんだろ？」

「こんな野郎しか居ない所に女が来るなんてな

「何でも土方さんの知り合いだとか」

真選組はこの話題で持ちきりであった。

「局長、副長、来ました」

中に入つてきたのは山崎だつた。

「入れる」

「わかりました！」

土方が山崎にそう言つと女人人が中に入つてきた。

黒髪で、なかなかの美女である。

黒い瞳で土方と近藤を見る。

「真選組に入る事になりました、白瀬 葵です。よろしくお願ひします」

葵は近藤と土方に挨拶した。

「よく来たな葵ちゃん！」

近藤は笑つた顔で葵を迎えた。

「はい、久しぶりですね近藤さん」

葵も挨拶をした。

「土方さんも久しぶりです！」

土方にも挨拶をした。

「おう」

土方は短く答えた。

「それじゃあ、皆に葵ちゃんの事紹介するからついてきて」

「はい」

近藤と土方の後を葵は追いかけた。

そして、隊士達が集まつて引ひ口を開けた。

隊士達が戸の方を見る……視線は葵に行く。
男共が葵に群がる。

「新しく入る女隊士つて君?」

「はい……」

「名前は?」

「白瀬 葵です」

「趣味は?」

「え、えーと」

ドンドン来る質問に葵は戸惑つた。

「お前等、座れ」

土方が言つと皆渋々戻つていった。

そして、土方と近藤は葵を連れて隊士達の前に来た。

「今日からウチに入る事になった」

近藤が言い出した。

「白瀬 葵です！よろしくお願ひします！」

葵はお辞儀をした。

『よろしくお願ひしまアアす！』

もの凄い大きな声が帰つてきた。

そりや、真選組は野郎の集まりだからね。

美女が来たとなれば、そうなるわ。

葵の挨拶が終わつた後、葵の歓迎会を開く事にした。

「えー、葵ちゃんの真選組就任を祝つてかんぱーい！」

『かんぱーい！』

近藤の合図に皆は酒を飲んだり、料理を食べたり、葵に質問したり、
色々な事をしていた。

「久しぶりでねエ、葵」

「あ、沖田さん。久しぶりです」

葵は沖田にも挨拶をしました。

「酒飲みやせんか？」

「いえ、未成年なので結構です。つて言つたが、沖田さん……あなた

も未成年ですよね？」

「気にしちゃダメで！」

沖田は酒を飲み始める。

「こいつはいつもの事だ」

「あ、土方さん」

土方がやって来た。

「死ねや土方アアア！」

もう完全に沖田は酔っぱらっていた。

刀で土方に斬りかかった。

酔うのが早いって？ 気にしちゃダメだよ。

それを土方は刀で受け止めた。

「総悟テメエ……いい加減にしろよ」

「今日こそ副長の座は貰いますぜ」

「上等だコラア！ かかるてこいや！」

土方と沖田の喧嘩が始まった。

「あははは……これも相変わらずだな」

葵はそれを見て苦笑いした。

こつして、真選組に葵が仲間に入つた。

ナナフシは銀時の飛び蹴りを喰らつた。

「急に何するんですか！？」
「ナナフシ」「急に何するんですか！？」

急は何でやが！」これがたぶんかのこ」と云ふ
事じやああああ！主人公である。俺と咲が出てねえじやねえか！

ナナフシ「しょ、うがないだろー。今回はホコキヤーを出す機のストー

リーダーだつたんだから!」

咲 錦只さん、今回はしょーがないよ」

ないわよー少しば見習いなさいー

銀時「お前は俺の母ちやんか!?」
「……」

「……いい加洞、一人共、静かにしてよ。いくつ、鉢呑さんでも、
容赦しないよ?」

咲の顔は無表情だった。

ナナフシ（やばーーあの顔は“冷血の鬼姫”の顔だ！）

銀時（いや） また完全じゃねえ！ 無表情でも鬼の様な視線の鋭さが
感じらんねえ！ 一步手前だ！）

ナナフシ・銀時（（謝りておくなり））

ここで一人の心はシンクロする。

ナナフシ・銀時「咲さん……」

咁「何？」

ナナフシ・銀時「すみませんでしたあ！」

咲・仲々すなへ

咲「よろしい」

咲の顔はいつもの優しい顔に戻った。

銀時「た、助かった」

ナナフシ「では、次回は葵のキャラプロフィールです！」

葵のキャラ紹介（前書き）

ナナフシ「今日は葵のキャラ紹介をしたいと思います」
咲「今回から前書きと後書きにも参加するんだよね？」

ナナフシ「はい、そうです」

銀時「それじゃ、葵よろしくな」

葵「はい、旦那」

銀時が言つと葵が現れた。

葵「今回から前書きと後書きにも参加させて貰つ葵です。よろしく」

ナナフシ「この四人で、前書きと後書きはお送りします」

銀時「それじゃ、始めますか」

葵「はい、私のキャラ紹介です。どうぞ」

葵のキャラ紹介

名前	白瀬 葵
年齢	18歳 誕生日5月9日
好き	真選組の皆（特に土方）、果物
嫌い	野菜、幽霊
髪	黒色
目	黒色

真選組に入ってきた美少女。

土方の事が好きであり、よく土方と居るのが多い。

銀時の事を「旦那」と呼ぶ。

真選組では、剣の腕は沖田と一、一を争う。

咲とは仲が良い。

ナナフシ「これで良いかな？」

銀時「最後の説明少なくねえか？」

ナナフシ「だつて、攘夷戦争に参加していた訳じゃないから咲とは違つてそれは短いよ」

葵「でも、もうちょっと長く出来なかつたの？」

咲「そうだよ、ナナフシ」

ナナフシ「すみませんね。それはそつと咲の剣術が決まりました」

咲「本当!」

ナナフシ「はい、咲は我流で静なる剣です」

咲「つまり、銀兄さんの剛の剣とは逆なんだね」

ナナフシ「はい、咲の剣は静なる剣を極めた感じですね。一本の剣で行う連続の突きが数本に見えたりする設定にしています。これで

“冷血の鬼姫”が目覚めたら凄い事に」

葵「語り出したらキリがないよ」

ナナフシ「おおっと、そうだつた」

葵「それでは、私のキャラプロフィールは終わりです」

葵のキャラ紹介（後書き）

ナナフシ「次回はオリジナルストーリーにするべきか……原作を使
うべきか……どちらか悩んでます」

咲「オリジナルストーリーが良いと思うな」

ナナフシ「そうですよね、でも、原作を使って咲が居る万事屋も
書いてみたいし」

銀時「さつさと決めるや」

ナナフシ「ああああああああ！もつ、真相は次回つづ事で！」

銀時「一様、オリジナルストーリーが良いか、原作を使うか、読者
から募集中」

咲「ない場合は次回をナナフシが決めるみたいだから、締め切りは
……次回が投稿されたらで！」

葵「投稿された後に来た場合は」了承ください

銀時「まあ、こいつの場合明日だらうけどな、次話投稿」

ナナフシ「それでは」

ナナフシ・銀時・咲・葵「「「また次回！……」」

第四訓～漆黒の狗～（前書き）

ナナフシ「今日は銀さん活躍出来ないかも」

銀時「なんでだアアアア！」

ナナフシ「いや、敵のオリキャラ決まったもんだから」

咲「私と戦わせると？」

ナナフシ「YES」

銀時「ネタバレ！」

ナナフシ「後、黒龍さんからで、えーと『咲の胸つてどれくらい大きいんですか？』だと……それはですね。Eです！」

咲「何教えるの！？」

ナナフシ「フフフッ、気にするなよ。案外大きいんだな」

咲「てか、どうやって知ったの！？」

ナナフシ「源外さんに頼んでとある機械を作つてもうつて寝てる間にこの中に入れて計つた」

源外「がはは、案外おもしろそつだつたからな」

咲「二人共死ねええええええええ！」

源外「乗れナナフシ！」

ナナフシ「おうーさらばだアアアアア！」

銀時「ジジイ特製の車に乗つて逃げたアアアアア！」

咲「待てええええええ！」

銀時「行つちまつた……さてと、オリジナルストーリーに決まったので、始まるぜ！」

第四訓／漆黒の狗／

「はあゝ、暇だな」

「そうアルナ」

「銀兄さん、神楽ちゃん……本当に全然依頼来ないね」

「これが当たり前です。咲さん」

四人共、それぞれ言つた。

「あれ？思えば咲さんの木刀変わつてませんか？」

咲の腰には、柄に『支笏湖』と彫られた木刀があつた。

「うん、ちょっとね」

実はたまたま銀時が木刀を通販で買つている所を見て、同じ木刀にするために銀時に頼んだのだ。

あの方法で。

「そうですか」

新八はそう言つた。

「私ちよつと外行つてくるね」

咲はそう言つと万事屋を出て行つた。

「気をつけてなア」

銀時はそう言つて見送つた。

咲がしばらく町を歩いていた。

「外に出てきたのは良いけど暇だなア」

咲はそこら辺をブラブラしていた。

ドンッ。

すると、誰かにぶつかつた。

「あ、すみません」

「こつちも悪かつたな……つてお前は隊士達がよく言つていた万事屋に入つた奴か」

咲がぶつかつたのは土方だつた。

「え？ 銀兄さん達を知つてゐんですか？」

「ああ、腐れ縁だがな。俺は土方十四郎だ」

「ああ、銀兄さんがよく言つていた大串さんですか」

「誰が大串だ！ 土方だ！ ひ・じ・か・た！」

「はいはいわかりました」

咲は適当に流した。

「なんか出会つて早々嫌われてね？」

「銀兄さんとよく喧嘩してゐる人だと聞いて……このマヨラー」

「何だろ？……こいつに言われたまめつちや心が痛い」

土方は胸を抑えた。

「土方さん！ どうしたんですか！？」

「葵か」

葵がやつてきた。

本当によく土方と居るな。

「あれ？ あなたは？」

「あ、どうも。雨宮咲です」

「私は真選組の白瀬葵です」

「ようしく」

「こちらこそ」

二人は握手した。

「あれ？ この二人……意氣投合してね？」

土方は二人を眺めていた。

二人はそのまま話し合いながら歩き出した。

「あれ？ 葵！ パトロールは！ おい！」

土方は置いてけぼりにされた。

「すっかり遅くなっちゃった」

咲は満月がきれいな夜を歩いていた。

葵と仲良くなり、ずっと夜まで話していた。

「綺麗だな」

咲は満月を見ながら歩いていた。

「そここの水色髪の女止まって下さい」

咲は言られて止まり、振り返った。

そこには、服装はほぼ黒色で染まっており、腰には鍔はなく、柄と鞘が黒色の刀を挿した女が居た。

肌は白かった。

「何？」

“冷血の鬼姫”とお見受けします

ピクッ。

咲はその言葉に反応した。

「何でそれを知っているの？」

「すみません。紹介が遅れました。僕の名前は影野

陰子いんこです

女は挨拶をした。

「私は何で知ってるのって聞いてるの」

「鬼兵隊と言えばわかりますか？」

「鬼兵隊！」

咲は顔を険しくした。

高杉が率いる鬼兵隊。

咲も銀時を探している時に一度高杉と会い、勧誘された。だが、咲はそれを断つた。

「高杉さんから聞いたの？」

「はい。僕はあなたを勧誘しに来ました

「前も言つた通り行かないよ。私は銀兄さんと共にあり続ける。私は大事な物を護る為に戦う。ただ破壊を楽しむあなた達にはついて行かない」

「そうですか……なら」

陰子は鞘から刀を抜いた。

刀身は黒に……いや、漆黒の色だった。

咲は木刀を腰から抜き、構えた。

「殺します」

陰子は咲に向かつて走ってきた。
咲も陰子に向かつて走り出した。

「ハア！」

咲は木刀を横薙ぎに振った。

咲の木刀は陰子に当たった……様に見えたが、それは幻影の様にゆらつと消えた。

「！！！」

「僕には異名がありましてね……“漆黒の狗”と言つ異名が」

咲は後ろから声が聞こえて振り返った。

そこには刀を振り下ろそうとしている陰子が居た。

「異名の意味はその名の通り……月夜の闇に紛れる事……からです！」

陰子はそう言つた途端刀を振り下ろした。

咲はそれを咄嗟に木刀で受け流した。

「……速いですね。あなたの剣は静剣ですか」
(私の剣が読まれた！)

咲はあれだけで自分の剣を読んだ事に驚いた。
「行くよ！ハアアアアアアアア！」

咲は連続で突きを放つた。

「そんな物……何！？」

陰子は驚いた。

何故なら一つの木刀で放つてある連続の突きが、咲の周りに五、六

本あるのだ。

「ちつ！」

陰子は一生懸命防御をするが。

（わからない！どれから放つてきているのかわからない！これは速すぎる！）

咲の木刀を防げないでいた。

防げたとしても数十回だけだ。

「フイニシシユ！」

咲は思いつきり突きを放つた。

「ドココココココ！」

素早く連続で突きを放つた。

その為、咲の周りにあつた木刀も一斉発射した様に見えた。それがすべて陰子に命中した。

「くう、やりますね。なら！」

また咲の目の前から姿を消した。

「後ろ！」

咲は素早く後ろを見た。

だが、居なかつた。

「絶対の死角である後ろからだけじゃありませんよ？」

咲の右側から声が聞こえた。

「喰らえ！」

陰子は刀を思いつきり右斜めに振り上げた。

咲はそれを咄嗟に交わした。

だが……。

「プシュッ。

頬に切れ目が入つた。

「そこまでバカじやないよ」

陰子は言つた。

「それに刀が黒いのは僕と一緒に闇に隠れる為だけじやない」

陰子は素早く咲の目の前に移動した。

そして、横薙ぎに刀を振った。

۱۰۰

咲はそれを防こうとした

- 1 -

咲は驚いた。

何故なら元が見えない

「二二二」

パツと下を向くと、刀を振り上げてきた。

中華書局影印
新編藏書票

陰子は咲との間合いを詰めて、連續で刀を振つてきた。

「アーヴィングの『アーヴィングの死』を読むと、アーヴィングの死を死んでから書いたものだ。

「うう！」

卷之二十一

「ふつ！」

「三國志」の地圖研究

咲は立ち上がつた。

ニシカニニの魔力

咲の表情は無表情であり、鬼の様な鋭い目線を陰子にぶつけていた。

咲は左隻を出さなかよ、勝てないと躊躇がかかる

陰子がそう言うと咲は木刀を構えて走り出した。

第四訓～漆黒の狗～（後書き）

ナナフシ「続きは次回です！」

咲「居たアアアアア！」

ナナフシ「げつ！見つかった。早く逃げなきや……つてあれ？源外さん？」

すでに源外の姿はなかつた。

ナナフシ「あいつ一人で逃げやがつたアアアアアアア！」

咲「死ねええええええ！」

ナナフシ「ぎやあああああああ！」

ナナフシは咲にボコ殴りにされ始めた。

銀時「たくつ、葵、次回予告を頼む」

葵「はい旦那。咲、“冷血の鬼姫”目覚める！“漆黒の狗”と恐れられる陰子に勝てるのか！？次回“第五訓～冷血の鬼姫の実力～”です！」

銀時「それではさようならア」

ナナフシ「助けてよオオオオオオ！アアアアアアアアア！」

第五訓～冷血の鬼姫の実力～（前書き）

ナナフシ「連續投稿！」

銀時「うわっ！ナナフシ！てか、体中ボロボロ！」

ナナフシ「気にするな！僕は読者の為ならばやつてやるが…たとえ死ぬ危険があつたとしても…！」

銀時「お前は自殺希望でもあるのか！？」

ナナフシ「でも…」

銀時「でも？」

ナナフシ「一人だけ逃げた源外を許さん！行くぞ銀さん！」

銀時「え？なんでお？」「後でチヨコレートパフェを奢つてやるの…」

よっしゃ！」

ナナフシ「行くぞオオオオオオ！」

銀時「オオオオオオ！」

葵「あ、行つちやつた。それではじりぞー！」

第五訓～冷血の鬼姫の実力～

「来い！“冷血の鬼姫”！」

咲は陰子に向かつて木刀を横薙ぎに振った。

（速い！）

陰子は咲の剣を見て、そう思った。

「だけど、そんな単純な攻撃」

陰子は咲の木刀を防ごうとした。

ガンッ！

鈍い音が聞こえた。

「ぶつ！し、下からだと！」

陰子の頸に木刀が直撃したのだ。

「ど、どうなつている！今さつき確かに横薙ぎに！」

「私はね……高速で剣を横薙ぎから振り上げに変えたんだよ。つまりさつきのは、高速で振つて生み出された幻影」

「つまり要領はあの突きと同じか」

陰子はニヤリと笑うと走り出した。

「なら、攻撃させなかつたら良い」と…

また消える刀で咲に襲いかかつた。

咲はそれを受け流したり、防ぎ始める。

「ハア！」

陰子は突きを放つた。

グサッ。

それが膝に刺さつた。

「これでもう……ぶつ！」

陰子は宙を舞つた。

そして体勢を立て直して着陸した。

咲が木刀を振り上げた後の格好で居た。

「油断しました……だけどこれでもう通常のスピードは出せない」

陰子は勝利を確信した。

だが、咲は立ち上がり、陰子の前まで距離を詰めた。
(ス、スピードが変わらない!)

陰子は驚いていた。

我慢して動かしたのか?と思つたが更に驚いた。

咲の顔は無表情のまま全然痛がつてゐる様子はなかつた。

無言のまま咲は陰子に木刀で打撃のラッシュを始めた。

「ぶつ、がつ、ごつ、ぐつ!」

陰子はダメージを喰らひつてゐる。

防げようとするが……。

(右!いや、違う下からだと!左!違う上から!)

何度も防げようとしても、舞いの様な剣を防げないでいた。

「ハア!」

「ド「オ!」

咲は陰子の顔面を思いつきり木刀で叩いた。

「ぶつ!」

陰子は怯み、後ろに下がつた。

(これが“冷血の鬼姫”的力!これで“白夜叉”には敵わぬといつて
……“白夜叉”はどれだけ化け物なんだ!)

陰子はその事を考へると“白夜叉”に恐怖した。

「これで終わり?」

「いや、まだ!僕はあなた「やめろ」し、晋助!」

「高杉さん」

咲は高杉に敵意を向きだしにした。

「そんなに敵意を向きだしにするなよ咲」

「何か用ですか?」

「いや、もうお前の勧誘は諦める。俺たちの敵に回るんだな咲?」

高杉は笑つた顔で聞いた。

「ええ、銀兄さん、ジラさんと一緒にあなたを斬る!」

「ククク、そうかよ。」「高杉イイイイイイ!」銀時か

銀時が咲の後ろの道からやつてきた。

「咲大丈夫か！？」

「うん」

咲の表情は元に戻った。

その途端、膝を抑えた。

「お前膝が！」

「大丈夫だよ」

咲は笑つて見せた。

「ちつ、今すぐに病院に連れていくてやるー！高杉！」

「あつ？」

「今回は見逃してやる！次会うときはぶつた斬るー！」

銀時は咲を背負つて、走つて去つていった。

「ぶつた斬る……ね」

高杉は“ククク”と笑つた。

「晋助……」

「行くぞ陰子」

「うん」

高杉と陰子は闇夜に消えた。

第五訓～冷血の鬼姫の実力～（後書き）

ナナフシ「源外イイイイイイイイ！見つけたアアアアアア！」

源外「ナナフシじやねえか」

ナナフシ「覚悟オオオオオオオ！」

ナナフシは木刀を振った。

源外「おつと、危ねえじやねえか」

銀時「喰らえジジイ！」

源外「銀の字まで！？」

銀時「俺がチョコレートパフェを奢つてもうつ為に犠牲になれええええ！」

源外「チョコレートパフェの為かよ！」

ナナフシと銀時は源外の左右に立つた。

ナナフシ・銀時「オラア！」

源外「そうは行くか！」

ビリビリ！

ナナフシ・銀時「ぎやあああああ！」

ドサツ。

二人は電撃を喰らい、その場に倒れ込んだ。

源外「ふん、甘いわ！おー見つけた」へ？

咲が源外を睨んでいた。

咲「死ねええええ！」

源外「ぎやあああああ！」

源外の叫び声が響いた。

葵「……次回は“陰子のキャラ紹介”です

ナナフシ「あ……後これも」

ナナフシは葵に紙を渡した。

葵「何々、『銀魂』冷血の鬼姫の日常～番外編咲と銀時、松陽との出会い』もよろしく。短編小説です……つて、これ宣伝！？」

ナナフシ「……」

葵「あ、気絶してる。それではまた次回」

陰子のキャラ紹介（前書き）

ナナフシ「わやつわやと出せばよかつた」
陰子「ククク、僕のキャラプロフィールね」

ナナフシ「陰子！？」

咲「陰子何しにきたの！」

陰子「今回だけだよ。それじゃ、さうさう

陰子のキャラ紹介

名前	影野 陰子
年齢	20歳 誕生日9月17日
好き	高杉、後はない
嫌い	咲、銀時、桂、辰馬（つて言つか戦う相手として楽しんでいる）真選組、幕府

実は幕府に所属していた武士。

その月夜に隠れる事から“漆黒の狗”と恐れられた。だが、幕府の事を嫌つており、反発的に動いていた。そこを高杉に拾われた。

高杉の事が好きである。

銀時、咲、桂、辰馬を狙つている（辰馬は少ないだろうけどね）。

ナナフシ「僕は思った」

銀時「何だ？」

ナナフシ「なんか、銀さんには咲、土方さんには葵、高杉には陰子となんかこうなつてるねつて」

銀時「咲が何で俺？」

ナナフシ「え？いや、咲が銀さんの事が好きだなんて……あー」

銀時「咲が俺の事を……」

ガンッ！

銀時「ゴファ！」

銀時はその場に倒れた。

後ろには木槌を持った咲が立っていた。

咲「ナナフシ…」

ナナフシ「はい！」

咲「あれ……どうしてくれるの？」

ナナフシ「源外さん！カモン！」

源外「はいはい、この機械で記憶操作ができるぞ」

咲はそれを使い、自分が銀時の事が好きってバレた部分を消した。

咲「今度から気をつけてね？」

ナナフシ「はい！」

銀時「ん？俺はいつたい？何か忘れてる様な」

咲は銀時が起きたと同時に木槌を捨て、何もなかつた様な顔をしている。

ナナフシ「銀さん、眠っちゃダメですよ」

銀時「あ？寝ちまたのか」

ナナフシ（銀さんがバカでよかつた）

咲「それでは終わりです」

陰子のキャラ紹介（後書き）

ナナフシ「やふうう！番外編小説2の攘夷戦争を書いたぜえ！」
銀時「そうか」
ナナフシ「反応薄っ！」
咲「思い出したくない記憶だから」
ナナフシ「あ、ごめん」
銀時・咲「……」
ナナフシ「今回はここまで！それでは次回に会いましょう！」

第六訓～迅雷～（前書き）

ナナフシ「今回もオリキヤラ出します」
銀時「思いつくな」
ナナフシ「今日は銀さんが活躍します」
銀時「マジでか！」
ナナフシ「はい」
銀時「よしあやアアアアア！」
咲「ナナフシ、私は？」
ナナフシ「活躍しません。前回任せたから」
咲「そり」
ナナフシ「やつぱ、銀さんとは違つな」
銀時「うむせー！それじゃあ始まるぜー。」

第六訓～迅雷～

銀時はファミレスにおり、一人でチョコレートパフェを食べていた。
てか、虚し！

「うるせえ！作者！」

悪かつたな！

え？他の万事屋メンバーは？
新八はお通のライブ。

神楽は定春の散歩。

咲はそれについていった。

と言う事で銀時は一人である。

銀時はパフェを食い終わると、店を出てある事を思い出した。
「ヤベツ、今日ジャンプの発売日じゃん」

銀時はコンビニに向かつて歩き出した。

「あ、発見ジャンプ！最後の一冊！」

銀時がジャンプに手を伸ばすと別の手が入ってきた。

「「ん？」

二人は見合つた。

そして、二人は驚いた顔をしていた。

「ら……雷雅か？」

「銀の兄貴か？」

二人はそう言い合つた。

「久しぶりだな」

「そうだな……攘夷戦争ぶりか？」

一人は歩きながらそう話していた。

雷雅とは攘夷戦争で知り合つた仲である。

「やうか……咲の姉御も居るのか」

「おう……てか、いい加減俺を銀の兄貴なんて呼び方やめてくんない？」

「何でだ銀の兄貴！俺はあんたを尊敬しているんだ！」

「だからつてよ、本当にやめてくれない？」

「やめん！」

雷雅は断言した。

話していると銀時はある事を思い出した。

「あ！ジャンプ買うの忘れた！」

銀時はそれに気付いたのだ。

「すまねえ雷雅！また会えたら会おうやー！」

「ああ」

銀時は走つていった。

「すぐ会えるや。銀の兄貴」

雷雅はニヤリと笑つた。

銀時は色んな所を回つたが、ジャンプは買えなかつた。色んな所を回つたせいで、夜である。

「ちくしょう！ジャンプ見当たらなかつた！」

銀時は橋を渡ろうとした時だつた。

目の前に包帯で顔を隠した男が立つていた。手には薙刀を持っている。

「あ？誰だテメエ？」

「俺は辻斬りだ。あなたは“白夜叉”だな？」

ピクッ。

銀時はその言葉に反応した。

「何で知つてやがる？高杉んとこの奴か？」

「高杉？知らんなそんな奴」

（高杉んとこの奴じやないなら攘夷戦争に参加していた奴か？いや、嘘をついている可能性も）

銀時は悩んだ。

「さつそく行かせてもらおうか」

包帯の男は地面を強く蹴つた。

「！」

銀時は驚いた。

目の前からその男が消えたのだ。

銀時は後ろから殺氣を感じ、振り返つた。

そこには薙刀を振り上げていて、今までに振り下ろさうとしていた。

「喰らえ！」

「ちつ！」

銀時は素早く抜刀して防いだ。

そいつは後ろに飛んだ。

「さすが“白夜叉”」

「テメエ！顔を隠してないで見せろやー！」

銀時はそいつに怒鳴つた。

「しようがないな」

そいつは包帯を取り始めた。

銀時は違和感は感じていた。

あの戦い方、声、武器。

何かと自分が知つてている人物に当てはまる。

（ま、まさかな）

銀時は考えが外れてほしいと願つた。

だが、それは叶わなかつた。

「やあ、銀の兄貴」

包帯の男の正体は雷雅だった。

「やつぱりテメエだつたか」

銀時は雷雅を睨んだ。

「テメエ……何で辻斬りなんかしている?」

「強者を求めて……かな」

雷雅がそう言うと一人の男の姿が思い浮かんだ。

神威

神楽の兄であり、宇宙海賊春雨の第七師団団長
神威は強者だけを求める夜鬼。

銀時も狙われている。

「そうか……テメエも変わっちまつたな」

銀時はそう言つた。

「だが、手加減はしねえ。昔の仲間だろが何だろうがたたつ斬る!」

銀時は木刀を構えながら言つた。

「ククク、殺ろうか……銀の兄貴……いや、『白夜叉』!」

雷雅は走り出した。

銀時も走り出した。

「オラア!」

雷雅は薙刀を横薙ぎに振つた。
ガキイイイン!

銀時はそれを木刀で防いだ。

「甘いね銀の兄貴……僕の異名を知つてゐるでしょ……『迅雷』を」

雷雅が地面を強く蹴ると、目の前から姿を消した。

「ちつ! 何処行つた!」

銀時は辺りを見回した。

「上だよ」

雷雅の声が聞こえ、上を向くと……薙刀で刺そうとしている雷雅が

居た。

そして、突きを放つた。

銀時はそれを横に交わし、素早く蹴りを入れた。

雷雅は蹴り飛ばされ、地面を転がった。

「ククク……面白いよ銀の兄貴！」

雷雅は銀時の前まで移動した。

「本気で行かなきやこっちがやられるからね」とすると、銀時の目の前から消えた。

その途端、体に切れ目が入る。

「ちつ！出やがった！」

雷雅は実は高速で移動して、銀時を攻撃しているのだ。

スピードは忍者に近い。

「ぐつ！」

銀時の体にドンドン切れ目が入る。

そして銀時は何かを見つけた様に……。

「こじだア！」

横薙ぎに木刀を振った。

「ぶつ！」

雷雅にそれが直撃し、吹き飛ばされた。

雷雅は立ち上がりと笑った顔で居た。

「さすが銀の兄貴だ。先読みをしてそこに木刀を振ったか

雷雅は不気味な笑いを浮かべる。

「次はこっちからだ！」

銀時は雷雅に攻撃を仕始める。

（ちつ！銀の兄貴の剣は読めねえ！）

銀時の我流に雷雅は追い込まれていた。

「オラア！」

雷雅の顔面に木刀が直撃した。

「ガハア！」

雷雅は吹き飛び、壁に直撃した。

銀時は雷雅に近づいた。

「俺の勝ちだな？」

「ふつ、それはどうかな？」

「グサッ！」

刺された音が聞こえた。

銀時が左足を見ると薙刀が刺さっていた。

「んがあああ！」

銀時は歯を食いしばる。

銀時の足から薙刀を抜くと……。

「今日は帰るわ。じゃあな銀の兄貴。後本当に杉の兄貴とは何も関係ねえよ」

それを言つとふらふらした足取りで逃げ出した。

「ま、待ちやがれ！」

銀時は左足を引きずりながら追いかけた。

だが、見失つてしまつた。

（雷雅……テメエまで高杉の様に変わっちまつたのかよ）

銀時はそう思った。

余談だが、帰つた後、咲達に何があつたか聞かれたが、「転けた」とか適当な事をぬかしてスルーした。

第六訓～迅雷～（後書き）

ナナフシ「オリキャラが出てきました！銀さんも少し苦戦しましたね」

銀時「うるせえ！」

ナナフシ「あんた今回『うるせえ…』が多いですね」

銀時「悪かったな」

咲「あはは……思えばナナフシ、読者に言つ事があるんでしょ？」

ナナフシ「あ！そうです！何か僕も『教えて！銀八先生！』が急にやりたくなつたんですね」

咲「突然だね！」

ナナフシ「やると言つても質問が来なきや意味がないんだけじね」

銀時「それに特に疑問に思つ事もない」と思つものばつかだと思つてるんだろう？」

ナナフシ「はい……でも……一様募集はしておきますー。」

咲「全然来なかつたら？」

ナナフシ「その時はその時と言つ事でー。」

銀時・咲「「樂觀的！」」

葵「しあうがないよ。旦那、咲ちゃん、それがナナフシだもん」

ナナフシ「質問がくれば、おまけか後書きに書きたいと思いますー。」

葵「それではさよならー。」

雷雅のキャラ紹介（前書き）

ナナフシ「せつせつキャラ紹介を出す！」

銀時「そうか」

雷雅「俺のだな」

銀時「雷雅……」

雷雅「銀の兄貴、心配しないでくれ。今回だけだ前書きに出るのは銀時「そうか」

雷雅「それじゃ、どうぞ」

雷雅のキャラ紹介

名前	疾風	はやて	雷雅	らいが
年齢	21歳	誕生日	4月9日	
好き	辛い物			
嫌い	苦い物			
髪	茶色			
瞳	黒色			

雷雅は攘夷戦争に参加した経験がある。

攘夷戦争では天人から“迅雷”と恐れられていた。

動きは忍者並みのスピードである。

得物は薙刀を使う。

銀時達の前に辻斬りとして現れる。

銀時を「銀の兄貴」、咲を「咲の姉御」、高杉を「杉の兄貴」、桂の事を「ヅラの兄貴」、辰馬の事を「辰の兄貴」と呼んでいる。

ナナフシ「こんなもんですね」
咲「まさか雷雅さんまで変わるなんて」
銀時「しそうがねえよ。世の中何が起きるかわからねえ」
咲「うん……」
ナナフシ「二人共！ そんなんしんみりにならないで！」
銀時・咲「…………」
ナナフシ「それでは！」

雷雅のキャラ紹介（後書き）

ナナフシ「せつせと次回も考えよー！」

銀時「張り切つてるな」

ナナフシ「おうよー書くのが面白くてたまらないんだよ」

銀時「そうか」

ナナフシ「それでは次回会いましょうー！」

第七訓「これ……なんですか？」（前書き）

ナナフシ「今日はたぶんギャグ！」

銀時「たぶんかよ！」

ナナフシ「お妙が出てきます！出さなかつたらあの人殺されます
し」

銀時「だろうな」

咲「お妙さんはどんな人だろう」

銀時「期待しない方がいいぞ」

咲「え？ 何で？」

銀時「ま、始まるぜ！」

第七訓「これ……なんですか?」 「喰」

今、銀時達万事屋メンバーは新八の家に居た。
銀時、新八、神楽の顔は青ざめていた。
何故なら……。

(おいいいいいい! 新八いいい! 何で暗黒物質ダークマターを食わねえと
いけねえんだアアアアア!)

(知りませんよ! 咲さんの事を話したら急に、『なら、歓迎会をし
ましょ! 料理に腕をかけるわ』とか言い出したんですよオオオオ
オオ!)

(新ハイハイ! どうするアルカアアアアアアアアアアアア!)

三人は小声で話し合っていた。

ガラッ。

襖が開いて、女人人が入ってきた。

「銀さん達待たせてごめんなさいね」
お妙が入ってきたのだ。

そして、咲を見る。

「あら、あなたが咲ちゃん? 」

「あ、はい、どうも、私は雨宮咲です」

咲はお辞儀した。

「私は志村妙です」

妙もお辞儀をした。

「銀さんの妹にしては出来た子ね

「悪かったな」

銀時は妙にそう言った。

「歓迎会なんて開いてもらつて……よかつたんですか? 」

「良いのよ。私も咲ちゃんを見てみたかったし。それに銀さんじゃ、
そんな事出来ないでしょ」

「黙つとけや」

銀時は妙にまた言った。

まあ、金欠なのは間違いないけど。

「作者黙れ！」

悪かつたな！

「それじゃ、料理持つてきますね」

「あ、はい」

咲以外は顔色を青くした。

（やばいいいいい！来るぞオオオオオオオオ！）

（ど……どうすれば！）

（私……食べたくないネエエエエエー！）

三人はそれぞれ思った。

それを知らない咲は哀れ。

そして、妙は料理を運んできた。

咲はそれを見て顔を青くした。

「あの……これは？」

咲は皿の上に乗っている黒い物体に指を向けた。

「これ？ごめんなさいね。私卵焼きしか焼けないの」

咲はこう思った。

（「……これが卵焼きイイイイイ！これどう見てもかわいそうな卵焼きだよオオオオオオオオ！）

咲は言つたら殺されると思った。

“冷血の鬼姫”でも無理か。

「あの……妙……なんか卵焼きの他にも色々あるんだが……」

銀時はテーブルに並べられている料理を見て言った。

「色々挑戦してみたの。それはオムレツ、それはスクランブルエッグ、それは……」

ドンドン妙は言つていく。

（おいいいいいい！これ絶対死ぬうううううううう！）

（姉上えええええ！僕達を殺す氣ですかアアアアアア！）

（やばいアルうううううううううううううう！）

（これ全部食べなきやダメなのオオオオオオ！）

四人は冷や汗を流した。

「ああ、召し上がり」

（（（（いやだアアアアアアアアー！））））

四人の心はシンクロした。

（どうするこの状況を！）

（今回ばかりはこれ全部食べる事になると皆死にますよー）

（こうなれば……新ハ犠牲になるアル！）

（えー嫌ですよー！）

（おーそれ良いな！）

（銀さんまでええええええ！）

（新ハさんいじめやめてあげよつよオオオオオ！早く解決策考えないとオオオオオオ！）

小声で話す四人。

「お……俺腹一杯だから良いわ」

銀時はそう言った。

「嘘ついてんじやねえぞ」

妙はニツコリ笑つたまま殺氣をぶつけた。

「すみませんんんんんんんん！」

銀時は土下座した。

銀時は新ハの頭を掴み……。
ダーグマタ
暗黒物質に叩きつけた。

「ぐぼおおおおおおおお！」

新ハはジタバタ仕始めた。

だが、すぐにそれが終わつた。

引き上げると白目を向き、鼻水と涎を垂らしている新ハだつた。

（新ハ！すまん！）

「いや、そう思つならやつちやダメだよオオオオオ！」

咲はツツコンだ。

「あらあら、新ちゃんつたらあまりのおにしさに氣絶したのね

（（（そんな訳あるかアアアアアア！）））

三人はツツコンだ。

「神楽ちゃん」

「な……何アル力姉御」

「こつちいらつしゃい」

神楽は言われる通り、妙の隣に座つた。

「はい、あ～ん」

神楽に暗黒物質を向ける。

「べ、別に良いアル！自分で食べれるアル！」

「照れちゃつて、あ～ん」

「良い……むぐつ！」

神楽は無理矢理食べさせられた。

神楽は何も言わず、白目を向き倒れた。

「「ちやアアアアアん神楽アアアアアアアアアア！」」

二人は神楽に近づいた。

「おい！神楽！」

「大丈夫！」

「ぎ……銀ちゃん、咲……川が見えるアル」

「ダメだアアアア！それ渡つたらダメだアアアアアア！」

「神楽ちゃんアアアアアアアアアアアア！」

二人は何とか神楽が川を渡るのを止めた。

「あれ？新八さんの……」

「は？」

銀時が咲に言われて見ると幽体離脱していた。

そして、今にも空へ飛んで行こうとしていた。

「逝くなアアアアアア！新八いいいい！」

「死んじやうよオオオオオオ！」

何とか魂を体の中に戻した。

「「ハアハア」」

二人は疲れ果てていた。

生徒「銀八先生！」

銀八「はあい、質問が来たので始める事になりました。このコーナー、アシスタントはこの人です」

咲「どうも、雨宮咲です」

銀八「はあい、行くぞペンネーム『黒龍』さんから、『黒龍』「おお、またオリキヤラ登場ですか」

銀時「この作品、攘夷戦争関係の奴が多く出て来るな」

ソラ「そう言つモノなんだる」

黒龍「二人にもいますよね。攘夷戦争時の仲間たちが」

銀時「当たり前のことを聞いてんじゃねエ」

ソラ「大半は死んじまつたけどな」

黒龍「雷雅は戦争のせいで戦鬪狂になつてしまつた悲しい存在ですね」

銀時「強さも相当あるみたいだしな」

黒龍「これは、あつちの銀さんもおちおちしてられませんね」

銀時「つうかよお、まさか高杉にもヒロインポジの奴が出来るとは思わなかつたな。マヨラーはいらねえけど」

黒龍「あなたあの人人がんだけ嫌いなんですか？ まあ、高杉好きな人はもう一人いますけどね。あの股の人人が」

銀時「おい、銃ぶつ放されるぞ？」

黒龍「で、では、折角なので質問します」

1・咲に質問。銀さんと子作りしたいと思いますか？

2・銀さんに質問。咲とさつちゃんと月詠の三人なら誰を彼女にしますか?

3. 新ハに質問。今の所まるでモテない現実について何か言つ事はありませんか？（黒笑）

黒龍「では、次回も楽しみにしています」

咲「え？えええええ！『ぎざぎざぎざぎざ』銀兄さんとこじこじこ子作り
イイイイー！しししししたいです！——」

銀八「大声で言つたよこの人！次は二つ目だ。むかつぐが銀時」

銀時「それはだな……答えられない」

銀時は冷や汗を流していた。

何故なら咲が刀を鞘から抜いて銀時を睨んでいるのだ。
咲と言えば何されるかわからない。

さつちゅんは……ないだろうな。

月詠と言えば殺される。

そつ言づ訳で答えられない。

銀ハ「すみません。つて言づか何処から刀を…」

咲「秘密です」

銀ハ「おい！まあ、良いや。最後の質問だが……」

新ハ「どんちくしょオオオオオ！こんな現実なんかアアアアアア！
何で僕はもてないんだアアアアア！」

新ハは暗黒物質を取り出す。

新ハ「こんな質問した黒龍と向こうで、もてまくっている銀さんに
発射アアアアアア！」

新ハは暗黒物質を大量に投げた。

銀ハ「おいいいいいい！何してんだアアアアアアアア！『黒龍』さん
！廊下に立たなくていいから逃げてええええええ！」

咲「質問は以上です」

銀ハ「質問待ってるぜ！本当に待ってるぞ！」

第七訓～「れ……なんですか？」～（後書き）

ナナフシ「…………川が見える…………」

葵「ナナフシイイイイ！渡っちゃダメえええええ！」

葵はナナフシを止める。

銀時「あ、川が」

咲「私も」

葵「旦那アアアアー咲ちやアアアアアアアアん！」

葵は二人も止めた。

葵「つ……疲れた……それではまた次回！」

ナナフシ「感想をくださああああい！」バタツ。

葵「言つ事言つて倒れた！質問も真面目じやなくとも良いですよ」

第八訓／毒牙の大蛇と猛獸の牙／（前書き）

ナナフシ「オリキヤラ思いついたぜ！」

銀時「またかよ！」

ナナフシ「でないとこの小説は進まない！わかるだろ！」

銀時「そ、それもそうだが」

ナナフシ「それでは」

咲「どうぞ！」

ナナフシ「俺が言つ筈だったのにいいいい！」

第八訓／毒牙の大蛇と猛獸の牙／

銀時と咲は珍しく一人で町を歩いていた。

他はつて？ 休みだから自由行動だよ。

銀時と咲は別の人から見ると恋人同士に見える。

銀時は彼女が居ない男共からの目線をジンジン喰らっていた。
(何だ？ 何でこんなに睨まれているんだ？)

銀時は義妹と歩いていると言う自覚しかなかつた。

咲は嬉しがつてゐるけど。

銀時と咲は話しながら歩いていた。

パフェ食つたり、服屋行つたり、もはやデートに近かつた。
いや、デートじゃね！？

「あれ？ 旦那じゃないですかい？」

銀時に喋りかけたのは沖田だつた。

「総一郎君か」

「総悟です」

沖田は間違いにツッコンだ。

「旦那、それが土方さんや隊士達が言つていた咲ですかい？」

「ああ」

銀時は短めに答えた。

「咲ちゃん！」

「あ、葵ちゃん！」

葵が沖田の後ろから來た。

「あ？ 誰だ？」

「あ、どうも、私は真選組の白瀬葵です」

葵は銀時に挨拶をした。

「真選組つて野郎しか居ないあそこにか！」

「え？ はい」

「毎日大変じやねえか？」

「え？まあ、でも慣れました」

「そうか……俺は坂田銀時だ」

「あ、沖田さんや土方さんがよく言つてこる」

「旦那、俺を忘れてませんかい？」

沖田は銀時に聞いた。

「忘れてねえって」

「そうですかい」

「私も旦那つて呼ばせてもらいます」

「勝手にしな」

銀時は適当に流した。

「確かに咲は旦那の義妹でしたねえ」

「ああ」

「本当に旦那の義妹ですかい？よく出来た子ですぜい」

「よく言われるわ！」

銀時は沖田に怒鳴つた。

「それじゃ、私達はパトロールの途中なので」

「旦那、気を付けてください。最近辻斬りが出てますぜえ」

銀時はその言葉に反応した。

雷雅じやないのか……と。

沖田と葵は去つていつた。

「辻斬りか……恐いね銀兄さん……銀兄さん？」

咲は銀時に訪ねた。

「あ、ああ」

銀時は悩んでいた。

人が少ない所まで來た。

「そ」の銀髪の男と水色の髪をした女、止まれ！」

二人はピタッと止まつた

男の妻一は刀バーナム

女には一本挿していた。

「誰だ？ テメエ等」

「在してし。」和達は辻轉り。

銀時は頭を搔きながら言った。

「お前等に勝負を申し込む」

辻轉りはじめには祝儀が戻しなむ

跟持也講尤。

(雷雅じやなかつたか)

銀時にそんと思つた

「すみません。俺は状況もつとめられません」

「私は蛇眼
毒仔」と云ふ

「俺は坂田銀時」

和は内宮町

「よ、まあ十斬り

「気にするな……始めようか」

「行くぜ！」

四人は同時に走り出した

新編 漢書注 卷之二

二人はそれを交わす。

咲はすかさず猛刀に連続の突きをする。

「ぐつ！」

猛刀はそれで吹き飛ばされる。

「私も居るわよ？」

毒仔が横から咲を斬りつつある。

ガキイイイイイ！

銀時がすかさず間に入り、それを木刀で防ぐ。

「やるな。この二人」

「そうね。猛刀」

二人はニヤリと笑つた。

「戦闘狂が」

銀時は呟いた。

「銀髪！」

銀時は猛刀の声に反応してみる。

すると、目の前まで猛刀が来ていた。

「喰らえ！」

猛刀は左手の刀で突きを放つ。

「ちつ！」

銀時は回転してそれを避ける。

その勢いのまま猛刀の顔面に木刀を叩きつけようつとする。

ガキイイイ！

それを毒仔の刀で防がれた。

素早く咲が毒仔を蹴り飛ばそうとする。

ドカア！

咲が猛刀に蹴り飛ばされた。

「咲！」

銀時は叫んだ。

「よそ見している暇はないわよ！」

毒仔を見ると刀を振り下ろしてきた。

銀時はそれを後ろに飛んで避ける。
シユパツ。

顔に切れ目が入る。

「ちつ！」

銀時は一人を睨む。

「行くぞ！」

銀時は連續で木刀を振る。

二人は防ぐ。

だが……ドカア！

二人は直撃して吹き飛ばされる。

「あの男の剣……型が変わりやがる」

「厄介だね」

二人は銀時を見てそう言った。

「それにあの女も本気じゃないな」

「二人共結構の実力者ね」

次は咲を見てそう言った。

「オラ！まだ行く……ぞ？」

銀時の視界がグラッとなつた。

「やつと効いてきたわね

「な……何をした」

銀時は毒仔に訪ねた。

「私の刀には毒があるの。あ、痺れ毒だから安心して
銀時はその場に座り込む。

「か、体が動かねえ」

「私の異名は“毒牙の大蛇”だよ」

「俺は“猛獸の牙”だ」

「異名があつたの！？」

咲は驚いた。

なら元々は何処かの組織に属していたものに違いない。

「それじゃあね。お兄さん」

毒仔は銀時の前に立ち、刀を振り下ろした。

（ここまでか！）

銀時は目を瞑つた。

ガキイイン！

何かがぶつかり合う音が聞こえて目を開けると……薙刀が自分の目の前に割つて入つていた。

「おい、銀の兄貴と咲の姉御は俺の獲物だ」
声がした方向を見ると雷雅が居た。

「「雷雅（さん）！」」

咲は雷雅がこの町に居た事に驚いた。

「やあ、咲の姉御」

雷雅はニヤリと笑つた。

ピクッ。

咲は高杉とはまた違うものを雷雅から感じて雷雅を警戒した。

「ククク、銀の兄貴と咲の姉御は俺の獲物だぜ？何してくれるんだ？しかも女……小賢しい方法使いやがつて」

猛刀と毒仔を睨む。

二人も感じた。

この男は危険だと。

雷雅は猛刀と毒仔に近づいた。

「わかつてんだろうな？」

「「はい！」」

猛刀と毒仔は逆らえなかつた。

「雷雅テメエ……」

「心配するな銀の兄貴。俺は弱つてゐる奴を殺ろつとは思わねえ

雷雅は去つていこうとする。

「万全の状態の時にまた相手を頼むよ」

雷雅は去つていく。

「ちつ！今回見逃してやる！ありがたく思え！」

「行くよ」

猛刀と毒仔も去つていつた。

銀兄さん！」

咲は銀時に近づく

「体が動かねえや。肩を貸してくれ」

咲は銀時を抱き
万事屋に戻った

おまか

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「はい、始まりました教えて銀八先生」

咲「アシスタントの咲です」

ソラ「死んだか？」

神楽「あ、アネゴの暗黒物質はやっぱり凄いね……」
ダークマター

新八「ふん！ あっちの僕を馬鹿にするからだ！」

銀時「……なんか新ハがいつも新ハじやないんだけど？」

アリス「いつも扱いを悪くさせているからだろ? うな」

ソラ「ん？」
黒龍が起きたぞ！」

黒龍 一
しん はち す

新八「えつ？」

黒龍「新八、ろす」

新八「いや、だから何て？」

跟持「黒龍のアッパー・カット」が炸裂した!?

セイバー「新八が星に……！」

神楽「アレを見るアル！ 新八が夜空に輝く星になつてゐるネ！-」

新八「僕……目立つ事が、できたかな……？」

銀時 なんか願いシヨボ!?

黒龍「では、質問です！」

2・咲と銀さんと神楽は災難だったね？ 気出してください。栄養ドリンク送るから元

3. 神楽に質問。
神威が優しいお兄ちゃんと言つシーンを想像して
みてください。

「銀時「おいいいいいいい！？？1は最早ただの復讐じやねえーか

セイバー「完全にブチギレているようですね……」

新八に物体Xが直撃して倒れる。

銀八「新八いいいいいいいい！次の質問に行くか」

咲「切り替え早つ！」

銀八 — 一つ目の質問だが

銀時・咲・神樂・一・ありかど二・黒龍(せん)

金ノ もそく食ひた様です 最後の質問だが神楽」

神楽 - 優しい兄貴アルカ……
神楽は想像仕始める。

神威「神楽、おいで」

神樂 一 兄貴！

神樂は神戻に甘える

神威「神楽、誰にいじめられたんだ？」

神樂「兄貴」

~~~~~

神楽「こんな感じアルかな？」

神楽はその後、幸せな家族を想像した。

銀八「神楽……本当に想像通りになるかはわからんぞ」

銀八は小声でツツコンだ。

咲「それではおしまいです」

銀八「本当に質問をくれええええええええええええ！」

## 第八訓「毒牙の大蛇と猛獸の牙」（後書き）

ナナフシ「新ハガアアアアアア！」

銀時「そんなにやばいのかよ！」

咲「恐いよオオオオ！」

新ハ「ナナ……でだ」

ナナフシ「はい？」

新ハ「ナナフシイイイイイ！何で僕の事が好きなオリキャラを作らないんだアアアアアア！」

新ハ「なんだとおおおおおお！」

新ハは木刀でナナフシに襲いかかる。

ナナフシ「無駄だアアアア！」

ナナフシはバズーカを構えて新ハにぶつ放す。

新ハ「ぎやあああああ！」

新ハは黒こげになり、倒れる。

ナナフシ「僕、射撃は得意ですから」

銀時「いや、それは当たる範囲でかいだろオオオオオ！」

ナナフシ「それではまた」

銀時「無視するなああああああ！」

## 猛刀と毒仔のキャラ紹介（前書き）

ナナフシ「やる事なかつたので投稿」  
銀時「どんだけ暇なんだ！」  
ナナフシ「まあ、気にしないでください」  
咲「今回はキャラ紹介だよね？」  
ナナフシ「はい、銀八先生もやろうかなアつて」  
銀時「そうかよ。それじゃ始めるぜ」

## 猛刀と毒仔のキャラ紹介

|    |     |          |
|----|-----|----------|
| 名前 | 獣牙  | 猛刀       |
| 年齢 | 21歳 | 誕生日3月29日 |
| 好き | 毒仔、 | 変わった物    |
| 嫌い | 雷雅  |          |
| 髪  | 黒色  |          |
| 瞳  | 黄色  |          |

毒仔とは恋人同士の仲。

辻斬りをしており、真選組に指名手配されている。

何処かの組織に居たらしく“猛獸の牙”と言つ異名がある。

剣はあまり戦闘で出してなかつたので、紹介するが、そのままの意味であり、牙の様に突き立てようとする。つまり突きを中心とした剣である。

|    |     |          |
|----|-----|----------|
| 名前 | 蛇眼  | 毒仔       |
| 年齢 | 21歳 | 誕生日2月26日 |
| 好き | 猛刀、 | 芸術       |
| 嫌い | 雷雅  |          |
| 髪  | 茶色  |          |
| 瞳  | 赤色  |          |

猛刀とは恋人同士の仲。

猛刀と同じ様に辻斬りをしている。

どうやら猛刀と同じ組織に居たらしく“毒牙の大蛇”と言つ異名がある。

毒で動けなくしてから殺す。  
ほぼ毒蛇に近い行動である。

ナナフシ「ふう、これでどうだ」

銀時「つて言うかあの二人恋人同士だったのか！」

ナナフシ「はい」

咲「オリキャラ同士がくつついたやつが出たよ

銀時「たくつ、次は質問」「一ナーダゼ」

ナナフシ「やつと、黒龍さん以外にも質問が来た」

銀時「よかつたな」

ナナフシ「それではまた次回！」

～おまけ～

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「はあい、質問に答えるぞコノヤロー」

咲「アシスタントの咲です」

銀八「たまには他の奴呼べよ。たくつ、ペンネーム『蘿薔』さんか

らの質問『「新ハに惚れる女なんていませんよ～んでもって出番消えちゃえ」

「ヤツホー

悠子ちゃんで～す

しつもーん

神威が銀さんに殺されたら

阿武兎と神楽ちゃんはどう思つの?』

「阿武兎のぶの字違ひ…」

「悠～宇～

アンタまだそのしゃべり方抜けてなかつたんですね～

「由利ちゃん

見逃してよ」

雷雅は皆に何で戦う意味を聞かなかつたの?

何かが変わつてたかもしれないのに…

「悠～宇～

待て～!』

「アハハハハ

怖いなあ由利ちゃん

面白かったです

頑張つてください!』『まったくその通りです～新ハに惚れる女なんて居ないんだよ（黒笑）』

咲「酷い～！」

銀八「まずは一つ田ですが……」

神楽「銀ちゃんもその時はしじうがないね。あのバカ兄貴が悪い時もアルネ……でも、本当に殺されたら……どうなるかわからないアル」

銀八「神楽……」

阿伏兎「ウチの団長がそう簡単にやられる訳がないだろ。殺された時は殺された時だ。戦場では敵討ちなんて思うもんじやないぜ」

銀八「こつちは恐い。二つ目だが

雷雅「ククク、その時には俺は答えを見つけてたんだ。聞く必要なんてないだろ？俺は強者を求める為だけに生きるんだよククク」

銀八「でも、聞いてたら変わってたかもな」

もし、雷雅が銀時達に相談していたら、銀時、桂、辰馬の元に居たんじやないかと想像する銀八。

銀八「と言ひ事で、『蘿蔔』さん廊下に立つてなさい。次はペンネーム『黒龍』さんからの質問だ

『黒龍』まさかまたオリキヤラ登場とは……

銀時「まあ、雷雅よりは弱そうだけどな

新八「つつかあつちの僕ウウウウウウー！ー？？」

黒龍「ただ俺は思った事があります

ソラ「何をだ?」

黒龍「毒仔の毒よりお妙の暗黒物質やフェイトの物体Xの方がずっと危険だと言う事に」

新八  
た  
確か  
に

黒龍一 毒勝負したお妙さんに勝てる人いないんじゃないでしょか  
？」

神楽「あ……アネゴアル」

黒龍 - あふん

# 黒龍一 しかし復活！！

# 銀時 - 復活早！？

セイバー、あなたは、アリスですか？」

アリバ・ニギハリ以上の生命力たな

黒龍「……ヒ、ヒつあんぢや質問これか」

1・新ハに質問。お前アイドルオタク＆オタクだからたぶん彼女で  
きないんじゃね？

2・そつちの万事屋メンバーに質問。そつちの新ハを見てどう思  
ますか？

3・咲に質問。そつちの小説で一番最悪だと思つ奴とかいますか？

黒龍「今回の質問はソリモードです。次回も楽しみにしています」

新ハ「そつ言つ質問すんじやねエヌヌヌヌヌ…！」

黒龍「あれま」『わやはははははは…向ソリの新ハがロココソソギヤ  
ははははは…！』

銀ハは黒龍さん所の新ハを見て笑っていた。

咲「一つ田だけど」

新ハ「何で毎回毎回黒龍は僕をいじめるんだアアアアア…殺してや  
るううううううう！」

新ハは黒龍の元へ走つていった。

銀ハ「勝てないのによ。まつたく、で一つ田だが」

銀時「新ハ……ロココソに落ちたが」

咲「新ハさん……変態だよ？」

神楽「ぶはははははは！アニメオタクにもなつて、更にロリコンになつたアルか！ぶははははは！」  
銀時と咲は軽蔑し、神楽は大笑いした。

銀ハ「フフフツ、『黒龍』さん！もっと新ハをいじめてやってください」

咲「質問は以上です」

銀ハ「質問を待ってるぜ！」

ナナフシ「さてと、寒い季節ですねア」

銀時  
そらたな

ナナハシ・で思ひた

ナナフノ「蜀國の山？」

# 銀時「おいいいいい！」

11

銀時「更」著者入門

ナナフシ「ゲストとしてくる人募集中！誰でも

「だ場合は僕らでやりま！」

ナナフシ「帝の功業は次回の段落まで

銀時「やめてくれええええええええ！」

ガガーリン それでは また次回！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5198y/>

---

銀魂～冷血の鬼姫の日常～

2011年11月23日18時54分発行